

参考文献

第六編

- 『始良地域農業の動向』始良地域農政推進協議会・加治木農林事務所 平成八年
- 『始良地方の研究』鹿児島女子師範学校・県立第二高等女学校発行 昭和十年
- 『明るい選挙推進の手引き』松尾徹人 平成四年
- 『延喜式』巻九・十 黒田勝美編 吉川弘文館 昭和五十六年
- 『鹿児島史学』「大隅国中世寺社の一考察―特に台明寺を中心に―」 小園公雄 一九八〇年
- 『かごしま文学案内』鹿児島女子大学国文学会編 春苑堂書店 平成元年
- 『鹿児島県議会史』鹿児島県議会編 一九七一年
- 『鹿児島県教育史』鹿児島県教育委員会 昭和三十六年
- 『鹿児島教育』上・下 山下 巖 昭和五十六年
- 『鹿児島銀行五十年史』鹿児島銀行 昭和五十五年
- 『鹿児島県警察史』上・下巻 鹿児島県警察史編纂委員会 昭和四十七年
- 『鹿児島県警察風土記』鹿児島県警察本部 平成六年
- 『かごしま戦後五〇年』南日本新聞社 平成七年
- 『鹿児島県史』三 鹿児島県 昭和四十二年
- 『鹿児島県史』五 鹿児島県 昭和四十三年
- 『鹿児島県消防史』鹿児島県消防協会 警察庁編 平成元年
- 『鹿児島県市町村変遷史』鹿児島県総務部編纂 昭和四十三年
- 『鹿児島県統計書』鹿児島県 昭和二十三年
- 『鹿児島県統計年鑑』鹿児島県 昭和二十八年
- 『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(43) 鹿児島県教育委員会 昭和六十二年
- 『鹿児島県の農林業』鹿児島県企画部統計課 一九九〇・一九九五年
- 『鹿児島県の歴史』原口虎雄 山川出版社 一九九〇年
- 『鹿児島県法規集』鹿児島県総務部学事文書課
- 『鹿児島新報』「さつまの山城」No.50 51 52 平成

五年七月二十六日、八月二・九日付

『鹿児島県方言辞典』橋口 満 桜楓社 昭和六十二年

『鹿児島の歴史』鹿児島県社会科教育研究会高等学校歴史部会 大和学芸図書 昭和五十五年

『鹿児島県林業史』鹿児島県林業史編さん協議会 平成五年

『角川日本地名大辞典 鹿児島県』角川書店 昭和五十八年

『合併促進協議会関係綴』東襲山村役場 昭和二十五年

『学校要覧』国分市内各小中学校沿革史 各年度

『鹿児島史料』旧記雑録前編 鹿児島県 昭和五十四年

『郷土史』上野 繁編 昭和十年

『郷土の史跡遺跡』国分市教育委員会 昭和四十五年

『郷土資料』東国分村教育会 昭和五年

『清水村村是』清水村 明治三十八年

『清水村郷土資料 第一巻』清水村

『清水村名所旧跡改帳』清水村

『清水村史料』清水村 大正四年

『霧島の歌』与謝野寛・晶子 昭和四年

『甕藩名勝考』復刻版 鹿児島県 昭和五十七年

『現行法規総覧』衆議院法制局・参議院法制局編集

『国分郷土誌』国分市 昭和三十五・四十八年

『国分町市制施行に関する資料』東襲山支所 昭和二十九年

『国分市勢要覧』国分市役所 各年度

『国分市中世城館調査報告書』本田 潔 昭和六十二年

『国分村誌』国分尋常高等小学校 大正七年

『国分の古蹟』守屋奈賀登・桑幡公幸 明治三十六年

『国分町史蹟』国分町 昭和十五年

『国分町町勢要覧』国分町役場 大正十五年

『国分諸古記』野村泰道家蔵

『工業技術庁調査報告書』

『在外私有財産実施調査表』鹿児島引揚者同盟国分支部 昭和三十九年

『薩隅日地理纂考』復刻版 鹿児島地方史学会 昭和四十六年

『薩藩叢書 第一編』「薩藩旧伝集」薩藩叢書刊行会

明治四十一年

『三国名勝図会』（天保十四年）復刻版 図書出版青潮社 昭和五十七年

『しきね』閉校記念誌 敷根小学校 昭和五十年

『敷根』創立八十八周年記念 敷根小学校 一九六一年

『島津国史』鹿児島県地方史学会 昭和四十七年

『社協の現状』鹿児島県社会福祉協議会 昭和六十一年度

『消防年報』国分地区消防組合 平成八年

『続日本紀 卷一』青木一夫ほか 岩波書店 一九八九年

『神社誌 下』「神社明細帳」

『西藩野史』卷之十 得能道昭 薩藩叢書刊行会 伊地知茂七 校訂 明治四十二年

『戦略戦術兵器事典 日本戦国編』学習研究社 一九九四年

『創立七十周年記念誌』鹿児島県立国分高校 昭和五十九年

『たばこの話あれこれ』日本専売公社管理調整本部広

報課 昭和四十四年

『中世郷土史研究法』「中世の生産技術」阿部猛 朝倉書店 昭和四十四年

『東西遊記』2 平凡社 一九九二年

『同窓會報 第二回記念号』上小川校同窓会 昭和三年

『平成七年度文化財研修講座』「中世の山城について」

三木 靖 平成七年

『平家物語 長門本』国書刊行会 昭和四十九年

『七十年史』鹿児島県国分実業高等学校 昭和五十二年

『日本史大事典 第一卷』平凡社 一九九二年

『日本史辞典』角川書店 一九九六年

『日本史用語辞典』柏書房 一九九二年

『農業を考える時代』渡部忠世 農山漁村文化協会 一九九六年

『農業センサス』鹿児島県 昭和二十九年

『ハイテク機器のしくみがわかる本』成美堂出版編

一九九七年

『八幡宇佐宮御託宣集』中野幡能 吉川弘文館 昭和

五十九年

『日枝神社明細帳』日枝神社編 明治四十年

『広瀬のうつりかわり』広瀬公民館 平成三年

『東襲山郷土史』東襲山村 昭和九年

『府中誌』東郡彦 昭和五十五年

『翻刻・其みちのく』大内初夫「其みちのく」雅松編

昭和四十七年

『松木のむかし』松木公民館 平成六年

『道帳』国分市立図書館蔵 文政六年

『南日本新聞』南日本新聞社

「新しい食と農のかたち」平成八年十二月二十日付

「社説」平成九年四月十三日付

「鹿児島島の山城」三木靖 平成七年十二月二十四

日付

「郷土のくらし一世紀 浦」昭和三十一年五月二十

八日付

「錦江湾の憂い1〜9」平成七年七月三〜十五日付

『山口誓子』栗田靖 桜楓社 昭和六十二年

『臨空国際産業都市』鹿児島県 昭和五十七年

第七編

『始良地方の研究』鹿児島女子師範学校・県立第二高

等女学校発行 昭和十年

『鹿児島・沖縄わらべ歌』久保けんおほか 柳沢書店

昭和五十五年

『鹿児島県郷土料理全書』今村知子 南日本新聞開発

センター 昭和五十四年

『鹿児島県大百科事典』南日本新聞社 昭和五十六年

『鹿児島県文化財調査報告書第十二集』『民俗資料調査

報告書』鹿児島県教育委員会 一九六五年

『鹿児島の民俗暦』小野重朗 海鳥社 一九九二年

『かごしま文化の表情 衣食住編』南日本新聞社制作

鹿児島県民福祉部県民生活課 平成四年

『鹿児島県方言辞典』嶋戸貞良 国書刊行会 昭和五

十五年

『かごしま民俗散歩』小野重朗 南日本出版文化協会

昭和四十一年

『鹿児島県の歴史』県社会教育研究会高等学校歴史部

会編 大和学芸図書 昭和五十五年

『かごしまわらべうた』鹿児島県小学校音楽教育研究

会編 評価問題研究所 昭和五十九年

『葛山民俗 十号』鹿児島県立東高校生徒会 昭和五

十年

『郷土史』上野 繁編 昭和十年

『清水村村是』清水村 明治三十八年

『九州の民家 常民文化叢書(10)』小野重朗 慶友社

昭和五十七年

『草木染・糸染の基本』山崎青樹 美術出版社 一九

七八年

『国分郷土誌』国分市 昭和三十五・四十八年

『国分町町勢要覧』国分町役場 大正十五年

『子どもの遊び』中種子町立歴史民俗資料館 平成四

年

『薩隅日地理纂考』鹿児島県教育会 復刻版 鹿児島

県地方史学会 昭和四十六年

『薩摩見聞記』本富安四郎 明治三十一年 東陽堂

『三国名勝図会 中巻』南日本出版文化協会 昭和四

十一年

『食生活の歴史』瀬川清子 講談社 昭和四十三年

『日本の食生活全集 鹿児島』農山漁村文化協会 一

九八九年

『日本の郷土料理』ドメス出版 昭和五十三年

『日本の民俗 鹿児島』村田 熙 第一法規出版 昭

和五十年

『日本の民俗 宮崎』田中熊雄 第一法規出版 昭和

四十八年

『日本昔話通観二十五 鹿児島』同朋舎出版 一九八

十年

『日本名葉辞典』守安 正 東京堂出版 一九七一年

『日本庶民生活誌』宮本常一 中央公論社 一九九三

年

『日本人のしきたり・ものしり辞典』大和出版 一九

八五年

『八幡宇佐宮御託宣集』中野幡能 吉川弘文館 昭和

五十九年

『東襲山郷土史』東襲山村 昭和九年

『府中誌』東 郡彦 昭和五十五年

『棕鳩十全集』『日当山侏儒物語』ポプラ社 一九八九

年

『南九州の庶民生活』村田 熙 第一書房 一九九四

年

『都城市史 別編』都城市 平成八年

『南日本新聞』「郷土のくらし一世紀 衣生活」 築地

健吉 昭和三十一年四月二十四日付

『南九州の民俗文化』法政大学出版局 一九九〇年

『南日本文化史』川越政則 昭和二十五年

『南日本民俗の探究』下野敏見 八重岳書房 昭和六

十一年

『民俗学辞典』民俗学研究所 東京堂 昭和二十六年

『村田 熙選集2 南九州民俗誌』村田 熙 第一書

房 一九九四年

『用と美』南日本新聞社編 未来社 一九六六年

〈国分郷土誌〉編さん関係者

監修

総監修

五味 克夫（鹿児島大学名誉教授）

民俗編監修

川野 和昭（県歴史資料センター黎明館）

編さん委員会

委員長

（教育委員会 教育長）立山 巖（平成九年十月四日まで）

〃 （ 〃 〃 ）樋園 正仁（平成九年十月五日から）

委員

教育次長・総務企画部長

総務課長・企画課長・財政課長

教育委員会総務課長・同学校教育課長

同社会教育課長・同社会体育課長

国分市立国分中央高等学校事務長

編さん専門委員（執筆者）

委員長

甲斐保之

副委員長

花蘭正志

委員

後藤良雄・小野郁子・中野 博・福元静男

編さん協力員

荒田義國・服部典孝・古川繁郎

石原常美・前田國正

編さん事務局

図書館長 松元政和

総務係 星原 敏・川辺喜三郎

図書係 肥後 宏・隈元智子・湊ゆかり

前畑義和・伊地知和枝

あとがき

新郷土誌の発行は、市制四十周年記念事業の一環として企画され、平成五年二月から編さん事業を開始した。それから五か年あまりの歳月を経て、平成十年六月、ようやく上・下巻、資料編の三冊、全三〇〇〇ページ・掲載写真約一〇〇〇点、表・図類約四〇〇点に及ぶ新国分郷土誌刊行の大事業を終えることとなった。

五年という歳月を長いとみるか、短いとみるか、人によって判断はまちまちであろう。ともかく、今、下巻を上梓するにあたり、正直なところやっとここまで漕ぎつけることができたという、達成感と安堵感で、文字通り感無量の思いが去来している。

ところで、「上巻あとがき」にも述べたように、本市は昭和三十五年・同四十八年の二回にわたって郷土誌を発行している。それぞれ当時の先輩学兄による、豊かな内容を持った価値高い市誌である。

当初の計画では、これら旧・前市誌の記述内容を底本にして、新しく追加する事項や、加除訂正事項などを検討して作成するという方針であった。しかし、前市誌発行後の二〇年の歳月のなかで、本市を取り巻く環境は、政治・経済・社会・文化、その他あらゆる分野で大きく変貌しつつあり、また、考古学上の新発見や、歴史上の未解明部分の究明もなされてきていた。以上のような観点から、委員の間から全面改訂をのぞむ声が高まり、先に述べたように三分冊からなる新郷土誌を編さんすることとなったのである。

執筆に際しては、市民をはじめ多くの方々に親しまれる郷土誌づくりを目指すとともに、一方、学術的研究の参考資料としても対応できる郷土誌をつくることを、基本方針とした。しかし、このことは言うは易く行うは難しの言葉通り、両立させることは至難の技であった。特に古文書・文献等は、古文体、文語体、漢文体のものが多く、その取扱いは腐心した。この意味において、資料編には本市関係の貴重な古文書・文献等を可能なかぎ

り原文のまま登載し、必要に応じて解説等を付記した。

「郷土誌は足で書け」とよく言われる。資料の発掘・散逸した資料の発見・旧家の土蔵調査・石造物調査・墓地調査・山城や旧跡の現地探訪・古老からの聞き取り・官公庁や事業所巡り・各種資料の収集・写真撮影など、文字通り市内外を巡り回った。更に不慣れた原稿執筆、校正など、時には夜を徹しての難行苦行の日々もあった。

この間、執筆半ばにして委員の病没や辞任により、暗礁に乗り上げる思いをしたこともあったが、新たに二人の委員の参加を得、心強い限りであった。

幸いにして、総監修に鹿児島大学名誉教授・鹿児島女子大学教授の五味克夫先生をいただくことができた。先生には、公私ともに極めてご多忙ななかに、時間をさいいただき、私ども編さん専門委員（執筆委員）のつたない原稿につぶさに目を通され、ご指導を賜った。また直接市内の旧跡等を委員と共に実地調査され、その保存や活用などについて貴重なお話をお伺いすることもできた。

更に民俗編の監修を県歴史資料センター黎明館の川野和昭先生にご依頼し、専門的な立場からのご懇切な指導により、民俗編を脱稿することができた。

ただ、全編の構成・執筆事項等について、当方の都合で事前に先生方のご指導を十分お受けすることができなかったことについては、深くお詫び申し上げる次第である。

本郷土誌がこうして世に出ることができたのは、両先生のご尽力のたまものであり、改めて深甚の謝意を表したい。

下巻の作成にあたっては、左記の先生方にそれぞれ専門の分野でのご執筆を依頼し、玉稿をいただいた。（敬称略）

財政 南 春雄（国分市収入役）

宗教 平田信芳（郷土史家）

石塔・石造物 松田 誠（県立福山高等学校）

仮面 出村卓三（県立沖永良部高等学校）

更に、下巻執筆中の平成九年五月、本市にとってこの上ないビッグニュースが飛び込んできた。「上野原テクノパーク」の第四工区から、「縄文時代早期前葉（約九五〇〇年前）」の定住化した国内最古級で、かつ最大規模の集落遺跡」が発見されたのである。「上野原遺跡」の名はたちまちのうちに全国に広まり、多くの考古学研究者が来訪し、一般見学者も二〇万人を超えた。

編さん委員会では、この「上野原遺跡」を別編として掲載することに決定し、その執筆を県立埋蔵文化財センターの新東晃一先生にお願いした。先生は、「上野原遺跡は国分市の宝です」といわれ、ご多忙の時間を割いて玉稿をお寄せいただいた。

別編 上野原遺跡 新東晃一（県立埋蔵文化財センター）

下巻の内容に光彩を放っていただいた五人の先生方に厚くお礼を申し上げる次第である。

なお、下巻「現代編」の執筆に際しては、資料の調査や提供、校閲等について、市役所各課・市付属機関・市内官公庁・諸事業所・市民各位から絶大なご協力をいただいた。これまた厚くお礼を申し上げます。

また、編さん専門委員個々の執筆箇所については、本来ならば明記すべきであろうが、章・節・項ごとに、あるいは内容ごとに、細かく執筆事項を分担し、ときには共同執筆の形をとったりして、相互検討、相互校正をしながら筆をすすめてきた。したがって細かく執筆箇所を明示することは困難と考え、編さん専門委員全員による共同執筆、共同責任という形をとらせていただくことにした。この点ご了承をお願いしたい。

歴史は「温故知新」であるときよくいわれる。この郷土誌を通して、多くの市民や読者の方々が、はるかな昔から語り継がれ、書き継がれ、引き継がれ、発展しつつある国分市の姿に触れていただき、大國分市建設への飛躍

の足掛かりとして本誌を活用していただければ、編集子としての喜びこれに過ぎるものはない。

また、本誌の諸資料作成にあたっては、事務局として終始その労をとっていただいた、代々の図書館長及び職員の方々、そして図表・原稿・文献・写真等の整理などの仕事をしていただいた、伊地知和枝氏のご尽力によるものであることを特筆しておきたい。

最後に編さん専門委員一同、自己の能力の範囲内で遺漏のないよう心がけたつもりであるが、思わぬ誤りを見過している点も多々あるかと思われる。また、未解明の事項や研究不足の事項等もあり、これらについてご指導・ご叱正を賜れば幸いである。

二十一世紀を迎えたいつの日かに、再び新視点、新歴史観に立った新しい郷土誌が誕生するであろう。その際に本誌がいささかでも役立ってくれることを念じつつ、あとがきとしたい。

おわりに、出版の運びにいたるまでのお世話をしていただいた、第一法規出版株式会社の出澤洋氏・佐伯浩志氏をはじめ社員各位に改めて謝意を表したい。

平成十年六月

編さん専門委員長 甲斐保之

国分郷土誌 下巻

平成十年六月三十日発行

編集 国分郷土誌編纂委員会

発行 国分市

千八九九—四三九四

国分市中央三丁目四十五番一号

電話（〇九九五）四五—五一—（代表）

印刷 第一法規出版株式会社

千一〇七—八五六〇

東京都港区南青山二—一—一七

（九州支社）

千八一〇—〇〇七四

福岡市中央区大手門三—五—一



整備の進む黒石岳森林公園



